様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００７６７

研究課題名（和文）ブラジルにおける各国移民の非同化適応戦略とトランスナショナリティに関する比較研究

研究課題名（英文）A comparative study on non-assimilation strategies and trans-nationality of immigrants from each country in Brazil

研究代表者
丸山　浩明（Maruyama, Hiroaki）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：５０２１９５７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、多民族国家ブラジルの中でも、特に多様な民族構成を示すパラナ州カストロ市を事例に、その主要な民族集団であるドイツ系・イタリア系・オランダ系・日系の越境的で間国家的な移民像を比較検討した。ドイツ系やオランダ系は、言語、宗教、生業、年中行事などに祖国との緊密な紐帯が維持されており、多国籍で重層的なアイデンティティが現在も維持されている。一方、日系やイタリア系はブラジル社会への同化・統合がより進んでいる。とくにイタリア系は、個人や家族レベルでその出自を知悉しているものの、民族的組織での活動はほとんどみられない。居住地や生業の選択にも、出自に関わる民族集団間の明確な差異が確認できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国家の枠組みは、歴史的に大きく変動を続けている。そのため、各移民集団の特性を現在の国家的枠組みで議論することは有意ではない。移住時の状況に即したより精細な出自を背景とする、移民の民族性に着目した分析が肝要であることを実証した。また、従前の「同化論パラダイム」に依拠した移民研究の限界を越え、多様な国家・民族間のはざまで、自らの他者性や異質性を利用して生きるトランスナショナルな移民像の実証的解明に迫った。今日、分断を深める多民族国家の惨状を目撃するとき、多様な移民集団が独自のトランスナショナリティを発揮し、協働して移民社会を創成してきたカストロ市の事例は、分断解消の重要な示唆を与える。

研究成果の概要（英文）：In this study, attempts are made to clarify the transnational and cross-border images of the major ethnic groups comparatively, i.e., German, Italian, Duch, and Japanese, within the highly diverse ethnic composition of Castro, a city in the state of Parana, Brazil. German and Dutch groups maintain strong ties with their homeland through language, religion, occupations, and annual events, preserving a multinational and layered identity to this day. On the other hand, Japanese and Italian groups have assimilated and integrated more into Brazilian society. Especially among Italians, although individuals and families are well aware of their origins, there is little participation in ethnic organizations. Clear differences related to ethnic origins are also evident in the choice of residence and occupation.

研究分野：地理学

キーワード：トランスナショナリティ　移民　ブラジル　パラナ州　非同化適応戦略　カストロ市　同化論パラダイム　コンタクトゾーン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまでの移民研究は、人口論的な出移民研究と移住先での同化適応研究に分断され、両者を結びつける斬新な視角や研究パラダイムを見いだせなかった。そのため、例えば日本人移民の生活体験を一元的に「海外の日本人」の体験として語り、結果的にその特徴を既存の国家・文化論の一部に無理やり押し込んでしまう過ちを繰り返してきた。このような傾向はブラジルの移民研究においても明らかで、各国の移民集団がいかに人種・民族的な他者性や異質性を調停して、ブラジル社会に同化・統合されてきたかという「同化論パラダイム」に依拠した国民・国家形成論への偏向が顕著である。

こうした中、2000 年代前半にアメリカの歴史学界を席巻したトランスナショナリズムの理論と方法論は、国家の枠組みや国境に囚われず、祖国との多様な接触や交流を維持しながら、むしろ移住国での自らの他者性や異質性を主体的に利用して生きる、移民のしたたかな生存戦略の解明に大きく貢献した。移民の生活体験を、ナショナルな分断線に縛られない方法で描出しようとするこの視座は、移住先での移民の単純な同化適応戦略では捉えきれない、国家間のはざまで複雑に揺れ動く、越境的で間国家的な移民像を解明する試みに有効といえる。

グローバリゼーションが進展した 1990 年代以降、国境を越えて人や物が大量かつ活発に移動を始めた。同時期にブラジルでは、日本移民や日系人の日本への「デカセギ」が顕在化し、国境を自由闊達に飛び越えて生活する移民の現代的な「トランスナショナリティ」表象として注目を集めた。超国家的（越境的）な生活世界に形成された多様な社会ネットワークを拠り所として、多国籍で重層的なアイデンティティをもって生きる移民の実像を描き出そうとするトランスナショナルな移民研究は、ブラジルではまだ緒に就いたばかりであり、研究テーマも彼らの生活世界のごく一部に光を当てたものに過ぎない。

このような移民研究の学術的背景や現状を踏まえると、各国（地域）移民集団のトランスナショナリティ（越境的で間国家的特性）を比較検討することで、従前の「同化論パラダイム」では十分に捕捉できなかった、他者性や異質性を主体的に活かした移民の生存戦略を実証的に解明できると考えられる。それは、今日分断を深める多民族社会の在り方を再検討するための、有益な里程標を築く実践的研究としても位置づけられる。

２．研究の目的

ブラジルは 19 世紀以降、約 550 万人（1820～1974 年）の移民を世界各地から受け入れて形成された多民族国家である。本研究は、ブラジルの中でも、とりわけ民族構成が多様な南部のパラナ州（「エスニック・ラボラトリー（民族実験室）」と呼ばれる）のカストロ市をおもな研究対象地域に選定して、各国（地域）移民集団の生活世界の特徴や、祖国との紐帯を示すトランスナショナリティを比較・分析することで、各国（地域）移民集団が主体的に保持してきた民族性、移民集団間の関係性、移民社会の形成過程とその内部構造を実証的に解明することを目的とする。

３．研究の方法

カストロ市の主要な移民集団であるドイツ系・イタリア系・オランダ系・日系を対象に、それぞれの経済・社会・文化的特徴と、移民のトランスナショナリティについて、フィールドワーク（景観観察や聞き取り調査）を実施する。

具体的な調査内容は、前者については、①移住の背景（移住前の状況）と経緯、②移住地選択の条件と方法、③移住地の景観や土地利用、④移民の属性（職業、配偶者の出自や通婚圏、母語・宗教・食文化の継承状況）、⑤民族的な経済・文化組織やネットワークと機能である。

後者については、①移民が置かれた国家間（祖国－移住国間）の外交・移住政策とその変化、②祖国に対する移民の心理的、政治・経済・文化的な紐帯の質や強度（出入国の目的や頻度、国籍、資金や物資の流動）などについて、時代的な変化も踏まえて解明する。

そのうえで、各国（地域）移民集団間の差異を比較検討することで、他の移民集団と差別化される他者性や異質性を主体的に利用した固有の生存・発展戦略を見いだし、多様な移民集団間の関係性の中で形づくられてきたカストロ市の特徴や都市構造を明らかにする。

４．研究成果

本研究で明らかになった各国（地域）移民集団の特徴をまとめると、以下のようである。

(1) ドイツ系

カストロ市のドイツ系は、入植年代から大きく 2 つに分類できる。第一は、1890 年にヴォルィーニ（現在のウクライナ北西部とベラルーシ・ポーランドの一部を含む地域）から入植した 25 家族で、彼らはサンタ・クララ移住地を創設した。その後、ルター派の牧師が入植してゲマインデや学校が建設されると、サンタ・クララ植民地のドイツ人たちもこれに合流して、ルター派教会を核としてドイツ系コミュニティが拡大した。これら初期ドイツ人移民の中には、その後カストロの市街地へ移動して、企業家として本地域の工業発展を主導する者も現れ、町中には立派な

ドイツ人クラブも設立された。
第二は、両大戦間期のドイツの深刻な経済危機の中で、海外定住協会（GSA、1931 年にプロテスタントの慈善活動団体を母体として設立）の斡旋で、1933～34 年にカストロ市に入植してテラノーヴァ移住地を創設したドイツ人である。彼らの出自はきわめて多様で、ドイツ北部の主要な都市、歴史的に「民族ドイツ」と呼ばれる移民を送出し続けてきた南西ドイツ、さらにはシレジア（現在のポーランド南西部からチェコ北東部を含む地域）からも入植している。そのため、一言でドイツ系といっても、言語、宗教、職業、学歴などもさまざまで、入植当初より移民同士の紛擾は後を絶たず、移民の活発な出入りに伴う耕地の交換分合もたびたび行われてきた。墓地もカトリックとプロテスタントに二分して建設されたが、今はカトリックのみが残り、ルター派のプロテスタントは別の場所に移動した。
このように、ドイツ系移民の内部には顕著な多様性が認められるものの、他の移民集団に比べて、自らがドイツ系であるという民族アイデンティティが強い特徴がある。そのため、ドイツ語（出自が多様なゆえに，特定の方言ではなく標準ドイツ語が同移住地では話されてきたという）やドイツ文化の継承に対する意識も高く、移住地の中に移民博物館まで開設されている。ドイツ語教室、民族ダンス、民族料理、民族音楽などが、さまざまな年中行事などを通じて継承されている。また、観光だけでなく、学業や仕事で長く祖国で生活する者もあり、祖国との太い紐帯もドイツ文化の継承と発展に役立っている。郊外の自然豊かな丘陵地で営まれる混合農業や、清貧で落ち着いた彼らの暮らしぶりは、ドイツの農村地帯を彷彿とさせる。

（2）イタリア系
カストロ市の多様な移民集団の中で、イタリア系の入植はもっとも古く（1870 年代に入植）、ブラジル社会への同化の程度も著しく高い。イタリア語を保持している人はほぼ皆無で、イタリア系の社会･文化的組織の活動も現在はほとんど見られない。これは、イタリアからの移民が 19 世紀後半から 20 世紀初頭の時期に集中し、現在のイタリア系の多くが第 3 世代から第 5 世代に当たることに加え、もともと彼らが共通イタリア語を話すことができず、近接言語であるポルトガル語に容易に同化していったことが挙げられる。言語的にも容易にブラジル社会に溶け込んだ彼らは、郊外に独自のコロニア（植民地）を創設することもなく、その多くは当初より市街地で商工業部門に携わり頭角を現してきた。
聞き取り調査を行った 3 家族の祖先は、いずれも 1870～90 年代にブラジル移住している。出身地は 2 家族がイタリア北部のヴェネト州、残りの 1 家族が南部のカラブリア州である。同じイタリア系でも、両者の言語や文化（食文化など）は大きく異なっている。彼らの職業は、会計士、塗料店、写真店、パン屋、企業経営者（農業や石灰採掘業）で、いずれもカストロ市では名の知れた商工業の事業家である。
彼らの生活世界には、「イタリア的な文化」の痕跡も、「イタリア系ブラジル人」という集団意識の獲得も、ほとんど感知することができない。彼らはそれほどブラジル社会と一体となり、その主要な民族集団としての地位を確立している。しかし興味深いことは、彼らが個人や家族のレベルにおいて、イタリア系としての自らのルーツを知悉しており、家族の紐帯として意識的に継承している点である。聞き取り調査を行った家族の中には、父方･母方双方の詳細な家系図（1630 年生まれの先祖まで遡れる家系図もあった）を作成したり、移民 120 年を祝って一族が集まり、記念品を作ったり記念写真を撮ったりしている実態が明らかになった。もはや「イタリア系」としての出自は、社会･文化的には顕著な機能がみられないが、個人や家族の紐帯を維持・強化するための機能は果たしているといえる。

（3）オランダ系
カストロ市におけるオランダ系の最初の入植地は、1911 年にブラジルで最初の農業協同組合を創設したカランベイ移住地である（現在はカストロ市から分離･独立してカランベイ市にある）。「牛乳の都」とも称されるカストロランダ移住地は、カランベイ移住地の先着同胞移民の支援のもとに、1951～1954 年にかけてカストロ市の郊外に創設されたオランダ人移住地である。ここはブラジルとオランダの「二国間移民協定」に則り創設された移住地で、移民に対する資本財の持ち出し許可、渡航費補助、支払猶予付きのローン融資など、手厚い国家的支援を背景としていた。
また、移住後の安寧な生活を実現するために、オランダのプロテスタント系宗教団体（教会組織）が移民の送り出しに主体的に関与した。移民は、同郷で同じ宗派に属する比較的労働力や資本力が豊かな篤農家などを中心に選抜された。さらに、ブラジルに農業や水利などの専門家を派遣して、移住候補地の入念な選定と事前調査を実施した点も、他の移民集団にはほとんどみられない特徴である。彼らは、カストロ市街地の近郊にも関わらず人々の入植を拒んできた、ヤポー川とその支流が作る沖積低地とその周辺の台地をあえて選択し、そこで酪農を生業とするみごとな「オランダ村」を建設した。
特筆すべきことは、こうした移住時の一時的支援にとどまらず、移住後もオランダから農業技術者やオランダ語教師などが継続的に派遣されたことで、他の移民集団と比べて祖国とのより太い紐帯がうかがえる。移住地内にはオランダを象徴する巨大な風車が建設され、その内部には

移民博物館や文化センターが開設されている。また、オランダの国王名を冠した学校では、オランダ語の授業も展開されている。さらに、移住地では「カストロランダ・オランダ民族芸能グループ」が活発に活動しており、オランダ文化の継承やオランダ系の結束を目的とするさまざまな年中行事が開催されている。

経済的には「カストロランダ農産業協同組合」を中心に結束し、ブラジルを代表する酪農・乳業基地がここに形成されている。2018 年には、酪農、養豚、穀物生産を中心に年商 33 億 8000 万レアル（約 1000 億円）を上げており、巨大アグリビジネス企業となっている。オランダ系の組合員たちは、カストロランダ移住地の周辺に広大な農地をまとめて所有しており、オランダ系以外の農業者の流入に対してはきわめて排他的である。

このように、今なお移住地での生活全般に民族的な特徴が色濃く認められる背景には、カストロランダ福音改革派教会（IER）を核として醸成・維持される、オランダ系の堅固な連帯意識と紐帯がある。それは、族内婚（おもに 2 世世代まで）に基礎を置くオランダ系コミュニティの形成、教会が運営する学校でのオランダ語教育、民俗芸能の継承や祭礼などの文化活動、農産業協同組合を通じた経済活動などに多大な影響を及ぼしている。その一方で、世代交代が進み 4〜5 世がオランダ系の中核となっていくなかで、非オランダ系との結婚の増加や、オランダ語の急速な喪失は厳然たる事実である。非オランダ系の人々を、いかにオランダ系コミュニティに包摂するかが、喫緊の重要課題となっている。

オランダ系は、故地オランダとの経済・社会・文化的関係を希薄化させることなく、むしろ自身のトランスナショナルな立場を積極的に利用して、多民族社会におけるオランダ系の特質やその役割を際立たせようとしている点に、顕著な特徴を認めることができる。

（4）日系

パラナ州への日系移民の流入は、1910 年代以降、隣接するサンパウロ州などから始まった。彼らは、コーヒー栽培に適した肥沃な土壌「テラローシャ」を求めて、「北パラナ」から州の南西部へと急速に入植地を拡大していった。その背景には、イギリス資本の「北パラナ土地会社」など、いわゆる土地売り業者の積極的な勧誘と斡旋があった。こうした日系人の代表的な入植過程からみると、南東部に位置するカストロ市の日系人は、その性格を大きく異にしている。

1950 年代、ブラジルでは日系の巨大農協「コチア産業組合（CAC）」が、種馬鈴薯栽培で大きな利益を上げていた。しかし、種芋は病気にかかりやすく、またドイツやオランダから輸入される種芋との価格競合にさらされ、その経営は不安定だった。CAC は種馬鈴薯の安定的確保をめざして、その栽培適地をブラジル国内に探していた。その結果、高燥で冷涼なカストロ市の気候と土壌が、種馬鈴薯栽培に適していることを見いだし、市内のマラカナン地区に 1000ha の土地を購入して、組合員 8 家族を入植させた。彼らは、カストロ市の日系コミュニティの先駆的家族である。

彼らの尽力により、カストロ市は種馬鈴薯の一大産地に発展した。カストロ市には、ブラジル国内の日系人や日本からの「コチア青年」が数多く入植して、日系コミュニティは急速に拡大していった。「コチア青年」とは、戦後に「全国農業協同組合」「海協連」「コチア産業組合（CAC）」の三組織が、それぞれ移民の選考、移住業務、移民の受け入れを分担して行い、日本の独身青年を計画的にブラジルに移住させる二国間の移民プログラムにより渡航した青年たちである。彼らは CAC 組合員に 4 年間雇用され、その指導の下で農業を実地に学んだ後、CAC の支援を受けて独立することになっていた。1970 年代初頭、カストロ市の日系人約 60 家族のうち、その約半分（31 人）をコチア青年が占めていた（ちなみに 2006 年現在、「コチア青年」は 11 人である）。

種馬鈴薯の病気は、すぐにカストロ市でも発生したが、幸い食用として出荷したものも市場で好評を博し、高値で売れたことからジャガイモ栽培は拡大を続けた。CAC は「カストロ倉庫」を建設して出荷体制を整えた。1960 年代、CAC は年間 80 万俵（うち 24 万俵は種馬鈴薯）ものジャガイモを出荷していた。また、1960 年代後半に導入されたダイズ栽培が、ブラジルの「セラード農業開発」の影響を受けて、1970 年代にはカストロ市でも急速に拡大・発展を遂げ、日系人農業の絶頂期を迎えた。

ところが、日系農家の拠り所だった CAC が、1994 年に巨額の負債を抱えて突然解散してしまった。CAC の庇護の下で農業経営を営んできた多くの日系農家は、自力での農業存続を断念して町に出て転職したり、日本に帰国したりする者まで現れた。一方、自己資金で農業の継続を決めた一部の元組合員たちは、1995 年に有限会社 UNICASTRO を設立して、現在もダイズやトウモロコシを中心とする穀物農業を継続している。

このように、他の移民集団に比べて入植時期が遅い日系は、カストロ市の郊外に分散居住して農業を営みながら、CAC や UNICASTRO といった日系の農産業組合を拠り所に日系コミュニティを維持してきた。農家が郊外に分散しているため、1961 年、市街地に寄宿舎を建設して、日系の子弟を平日に受け入れて、日本語や日本文化などの教育も行った（その後、市内に転居する日系人が増えたため、寄宿舎は 1990 年代に閉鎖された）。

また 1977 年には、寄宿舎に隣接して「カストロ文化スポーツ協会（ACEC)」と若者協会（AJ）が設立され、日系の農産業組合とともに日系コミュニティの要となった。当時は、ダイズ栽培の発展による好景気のさなかで、1978 年、ACEC は潤沢な資金を元手に広大な土地を市内に購入して、そこに日系人が集い文化イベントやスポーツを楽しめる大ホールやスポーツ施設（野球場、バレーボールコート、フットサルコート、ゴルフコース）を建設した。敷地内には 13 種類を超える 800 本以上の桜が植栽され、桜祭り、寿司祭り、運動会、アマチュアゴルフ大会などの年中行事が目白押しである。これらの行事には日系人以外の参加者も数多く、協会運営のための資金集めや、他の移民集団との交流を促進する意味合いもある。

当初、日系人は農業者（ジャガイモ栽培者）としてカストロ市に移住したが、ばくち的（市場価格の変動が大きい）なジャガイモ栽培の失敗や、突然の CAC の解散などにより、農業を諦めて市内に転居し、農外部門（公務員や会社員など）に就業した者も多い。彼らは、多様な民族が集住する町での生活を通じて、ドイツ系、イタリア系、オランダ系などと結婚し、急速にブラジル社会に同化していった。郊外で農業を営み、現在も日系人としてのアイデンティティを堅持して生きる人々とは、また別の人生を選択した日系人といえる。

（5）カストロ市における移民集団の分布と民族性

本研究では、カストロ市のさまざまな移民集団の中で、代表的な 4 つの民族を対象に、その植民・開発の歴史と民族性を、トランスナショナリティに着目しながら分析した。

移民の時期を比べると、19 世紀後半にカストロ市に入植したイタリア系とドイツ系が古く、次いでオランダ系、日系の順である。ただし、20 世紀初頭に創設された最初のオランダ系移住地は、その後カストロ市から分離・独立したため、現在のカストロ市の行政区域でみれば、オランダ系（カストロランダ移住地）と日系は、第二次世界大戦後のほぼ同時期にカストロ市に入植している。

イタリア系とドイツ系は、カストロ市の商工業分野の発展を担ってきた。イタリア系は、入植当初より独自の移住地を形成することなく、その多くが市街地でおもに商業分野に参入して、その発展を担ってきた。ドイツ系は、郊外の移住地にとどまり農業を続ける者と、市内に転居しておもに工業分野でその能力を発揮する者がみられた。

一方、農業分野でめざましい貢献をみせたのが、オランダ系と日系である。特にオランダ系移住地のカストロランダは、ブラジルを代表する酪農・乳業基地に発展しており、他の移民集団の追従を許さない巨大アグリビジネス企業の「カストロランダ農産業協同組合」を築き上げた。一方、日系は種馬鈴薯栽培という、かなり特殊な耕種農業の発展を企図してカストロ市に入植した。オランダ系とは異なり、カストロランダのような計画的集団移住地はなく、各農家がそれぞれ郊外に分散して農業を営んできた。

オランダ系が祖国や公的機関の手厚い支援を受け、教会を中心に醸成される堅固な民族的紐帯を基盤に、一致団結して酪農や乳業の発展にまい進してきたのに対し、日系には国や公的機関からの支援は少なく、各農家の奮闘と能力にその成否はゆだねられていた。加えて、唯一の支援組織だった CAC も突然解散してしまい、農業からの撤退を余儀なくされた者も多かった。移住当初は、それぞれ異なる農業分野でしのぎを削ったオランダ系と日系だったが、移民集団に対する支援体制の顕著な差が、その後の発展に大きな差異を生みだしたといえる。戦前に創設されたドイツ系移住地のテラノーヴァでも、農業はずっと営まれているが、その内容はオランダ系が確立した酪農をベースに、さまざまな穀物栽培を加えた混合農業であり、彼らの農業分野における存在感は希薄である。

このように、カストロ市では多様な移民集団が、市街地の中で、あるいは郊外の個人農場や集団移住地で、それぞれの民族性を発揮しつつ生業を営んできたことが実証的に明らかになった。そこには、各国（地域）移民のトランスナショナリティの違いも大きな影響を与えていることが分かった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本　充 | ４．巻<br>1662 |
| ２．論文標題<br>ブラジルにおけるドイツ系の移民過程と言語・文化の継承 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>ブラジル特報 | ６．最初と最後の頁<br>6-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>丸山浩明 | ４．巻<br>－ |
| ２．論文標題<br>ブラジルにおけるオランダ系移住地の創設と発展 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>人文地理学会特別研究発表要旨集 | ６．最初と最後の頁<br>10-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>丸山浩明 | ４．巻<br>48 |
| ２．論文標題<br>ブラジルにおけるドイツ・オランダ系移民の生存戦略と民族性ーパラナ州カストロ市の事例ー | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>立教大学ラテンアメリカ研究所報 | ６．最初と最後の頁<br>1-4 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本　充 | ４．巻<br>48 |
| ２．論文標題<br>ブラジル・カストロ市のドイツ系移民 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>立教大学ラテンアメリカ研究所報 | ６．最初と最後の頁<br>5-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>丸山浩明 | 4．巻<br>48 |
| 2．論文標題<br>ブラジル・カストロ市のオランダ系移民 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>立教大学ラテンアメリカ研究所報 | 6．最初と最後の頁<br>17-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>丸山浩明 | 4．巻<br>47 |
| 2．論文標題<br>ブラジル帝政時代におけるヨーロッパ移民の導入と移住地建設 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>立教大学ラテンアメリカ研究所報 | 6．最初と最後の頁<br>73-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>ドナシメント　アントニー | 4．巻<br>41 |
| 2．論文標題<br>La Colonisation japonaise au Bresil (1908-1941) : definitions et apercu historique | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>立教大学ランゲージセンター紀要 | 6．最初と最後の頁<br>13-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>丸山 浩明 | 4．巻<br>15 |
| 2．論文標題<br>ブラジル・パラナ州カストロランダにおけるオランダ系移住地の創設と発展要因 | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>地理空間 | 6．最初と最後の頁<br>25～48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24586/jags.15.1_25 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Anthony DO NASCIMENTO | ４．巻<br>3 |
| ２．論文標題<br>L'Immigration japonaise dans l'Etat du Parana (Bresil) apres la Seconde Guerre mondiale : les Cotia Seinen et la communaute nikkei de Castro | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>The Bulletin of Language Education Center Tokai University | ６．最初と最後の頁<br>19～38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.18995/24367532.2.19 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本　充 |
| ２．発表標題<br>ブラジル・パラナ州カストロのドイツ系集落における移住・定住過程 |
| ３．学会等名<br>歴史地理学会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>丸山浩明 |
| ２．発表標題<br>カンポグランデの沖縄県系人 |
| ３．学会等名<br>沖縄県立図書館企画展（招待講演） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>丸山浩明 |
| ２．発表標題<br>ブラジルにおけるオランダ系移住地の創設と発展 |
| ３．学会等名<br>人文地理学会特別研究発表（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>丸山浩明 |
| ２．発表標題<br>ブラジルにおけるドイツ・オランダ系移民の生存戦略と民族性ーパラナ州カストロ市の事例ー |
| ３．学会等名<br>立教大学公開講演会（ラテンアメリカ研究所主催）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本　充 |
| ２．発表標題<br>ブラジル・カストロ市のドイツ系移民 |
| ３．学会等名<br>立教大学公開講演会（ラテンアメリカ研究所主催）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>丸山浩明 |
| ２．発表標題<br>ブラジル・カストロ市のオランダ系移民 |
| ３．学会等名<br>立教大学公開講演会（ラテンアメリカ研究所主催）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計7件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北村暁夫、中嶋毅 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>放送大学教育振興会 | ５．総ページ数<br>252 |
| ３．書名<br>近現代ヨーロッパの歴史：人の移動から見る | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北村暁夫、田中ひかる編 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>山川出版社 | ５．総ページ数<br>211 |
| ３．書名<br>近代ヨーロッパと人の移動：植民地・労働・家族・強制 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>矢ケ﨑 典隆、加賀美 雅弘、牛垣 雄矢、丸山浩明 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>朝倉書店 | ５．総ページ数<br>174 |
| ３．書名<br>地誌学概論〔第2版〕 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北村暁夫 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>岩波書店 | ５．総ページ数<br>304 |
| ３．書名<br>イタリア史10講 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>小松久男、吉澤誠一郎、佐々木紳、青島陽子、麓慎一、北村暁夫 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>山川出版社 | ５．総ページ数<br>280 |
| ３．書名<br>1861年 改革と試練の時代 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎編 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>岩波書店 | ５．総ページ数<br>322 |
| ３．書名<br>国民国家と帝国　19世紀 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>丸山浩明 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>岩波書店 | ５．総ページ数<br>286 |
| ３．書名<br>アマゾン五〇〇年ー植民と開発をめぐる相剋ー | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 北村　暁夫<br>(Kitamura Akeo)<br>(00186264) | 日本女子大学・文学部・教授<br>(32670) | |
| 研究分担者 | ドナシメント　アントニー<br>(Do Nascimento Anthony)<br>(30734991) | 東海大学・語学教育センター・講師<br>(32644) | |
| 研究分担者 | 山本　充<br>(Yamamoto Mitsuru)<br>(60230588) | 専修大学・文学部・教授<br>(32634) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |